

2021年度わが国貿易収支、経常収支の見通し

～ 輸出入の回復は緩やかだが、貿易収支は改善し、経常収支黒字も拡大 ～

I. 要旨

1. 商品別貿易の見通し(通関ベース)

● 2020年度 ～ 新型コロナウイルス感染症の影響による世界的な経済縮小により、輸出入ともに大幅に減少

輸出総額は2019年度比10.9%減の67兆6,120億円となる。内訳は、輸出数量が同10.0%減少、輸出価格が同1.0%低下。新型コロナ危機による世界的な需給両面へのショックに伴い、幅広い品目で輸出数量が減少する。

輸入総額は2019年度比14.4%減の66兆920億円となる。内訳は、輸入数量が同6.6%減少、輸入価格が同8.3%低下。資源・素材市況の下落を背景に鉱物性燃料の輸入減が輸入総額を押し下げる。

この結果、通関貿易収支は1兆5,190億円の黒字と、3年ぶりの黒字に転じる。

● 2021年度 ～ 輸出入ともに持ち直すも新型コロナ危機前の水準には回復せず

輸出総額は2020年度比8.5%増の73兆3,890億円となる。内訳は、輸出数量が同7.0%増加、輸出価格が同1.5%上昇。2020年度に大幅に減少した輸送用機器、一般機械、原料別製品等の輸出が増加に転じる。

輸入総額は2020年度比6.5%増の70兆4,030億円となる。内訳は、輸入数量が同3.2%増加、輸入価格が同3.2%上昇。原油や石炭の価格上昇で鉱物性燃料の輸入が2020年度比で2割近く増加する。

輸出入ともに2020年度比で回復に転じるものの、いずれも新型コロナ危機前の水準には届かない。通関貿易収支は2兆9,860億円の黒字と、2年連続の黒字を計上する。

2. 経常収支の見通し

● 2020年度 ～ 訪日外国人の消費、海外から受け取る利子・配当が減少し、経常収支黒字は縮小

経常収支黒字は16兆5,160億円に縮小する。新型コロナウイルス感染症の影響により、訪日外国人の消費(いわゆるインバウンド消費)の大幅減により、サービス収支赤字は2019年度の4,780億円から3兆4,710億円に拡大する。また、海外から受け取る配当金や投資収益を含む第一次所得収支の黒字幅は2019年度の21兆4,210億円から18兆9,140億円に縮小する。

● 2021年度 ～ 経常収支黒字は2019年度と同水準に回復

経常収支黒字は20兆7,340億円に拡大し、2019年度と同水準に回復する。東京オリンピック・パラリンピックが新型コロナ感染防止に留意しつつ開催されることを前提に、インバウンド消費を含むサービス収支の赤字幅は2兆1,010億円に縮小する。また、世界的な経済の持ち直しを背景に、第一次所得収支の黒字幅は19兆8,540億円に拡大する。

お問い合わせ :

一般社団法人日本貿易会 調査グループ

〒105-6106 港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル6F

Tel: 03(3435)5959 Fax: 03(3435)5979 e-mail: chosa@jftc.or.jp

<https://www.jftc.or.jp>

…HPより全文ご入手いただけます。

II. 総括表

【 通 関 貿 易 】

	2019年度 実績		2020年度 見込み		2021年度 見通し	
	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)
通関貿易収支	▲ 1,291	+319	1,519	+2,810	2,986	+1,467
輸 出	75,880	(-6.0%)	67,612	(-10.9%)	73,389	(8.5%)
数量要因		-4.4%		-10.0%		7.0%
価格要因		-1.6%		-1.0%		1.5%
輸 入	77,171	(-6.3%)	66,092	(-14.4%)	70,403	(6.5%)
数量要因		-2.3%		-6.6%		3.2%
価格要因		-3.8%		-8.3%		3.2%

【 経 常 収 支 】

	2019年度 実績		2020年度 見込み		2021年度 見通し	
	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)	(10億円)	対前年度比増減 (伸び率)
貿易・サービス収支	189	+489	▲ 308	-497	2,619	+2,927
貿易収支	667	+32	3,163	+2,497	4,720	+1,557
輸 出	74,943	(-6.7%)	66,777	(-10.9%)	72,482	(8.5%)
輸 入	74,277	(-6.8%)	63,613	(-14.4%)	67,762	(6.5%)
サービス収支	▲ 478	+457	▲ 3,471	-2,994	▲ 2,101	+1,371
第一次所得収支	21,421	-212	18,914	-2,507	19,854	+940
第二次所得収支	▲ 1,469	+272	▲ 2,090	-621	▲ 1,740	+350
経常収支	20,141	+549	16,516	-3,625	20,734	+4,218

(注) 金額は表示単位未満を四捨五入しているため計算が合わないことがある。

【 前 提 条 件 】

	2019	2020	2021
世界貿易 (暦年)	0.2 %	▲ 7.9 %	7.6 %
世界経済 (暦年・実質)	2.8 %	▲ 4.4 %	5.1 %
米 国	2.2 %	▲ 4.6 %	3.3 %
ユ ー ロ 圏	1.3 %	▲ 8.7 %	5.3 %
アジア新興国	5.5 %	▲ 1.3 %	7.7 %
日本経済 (年度・実質)	0.0 %	▲ 6.2 %	3.4 %

(注1) アジア新興国はIMF定義によるEmerging and Developing Asia。

(注2) 上記の前提条件に加え、11月中旬の外国為替市場および原油市場の動向を参考に、円相場は2020年度106円/ドル、2021年度106円/ドル。原油入着価格は2020年度41ドル/バレル、2021年度50ドル/バレルとの前提条件において積み上げ作業を実施。

Ⅲ. 今回見通しのポイント

当会の見通しの特徴は、専門委員会参加 8 商社が社内外にヒアリング等を行い、それらを商品別に積み上げて作成している点である。今回の見通しは、新型コロナウイルス感染症の影響により各国経済、国際貿易、国民生活が厳しい状況にあるなかで、①2021 年度には主要国で新型コロナの新規感染者が減少傾向となり、ワクチンや重症化を防止する治療薬の普及により各国経済活動への制約が緩和される、②国内でも新型コロナウイルス感染症の影響は徐々に鎮静化し、経済活動は正常化に向かうとの前提条件を設定して作成したものである。

今後の貿易動向は、国内外における新型コロナウイルス感染症を巡る状況に大きく左右されると考えられるため、見通しからの上振れ、下振れの可能性は大きいが、今回見通しのポイントとして次の 3 点が挙げられる。

- ・ 2020 年度に大きく落ち込んだ輸出・輸入は、いずれも 2021 年度には回復に転じるが、新型コロナ危機前(2019 年度)の水準まで戻らない品目も多く、品目ごとのばらつきが鮮明化するというのが、今回われわれが見通し作業を通じて得たシナリオである。
- ・ 例えば、2020 年度下半期に入って米国および欧州向け等の自動車の輸出は回復基調に転じている。しかし、われわれの予測では、本格回復には時間を要し、2021 年度の自動車の輸出は、2019 年度の水準まで回復しないと想定する。一方、半導体等電子部品の輸出は、新型コロナウイルス感染症の影響で一時落ち込んだが、アジア等各国の生産活動再開後は回復に転じ、2020 年度は 2019 年度の水準を若干上回り、2021 年度も 5G 関連の需要増等により順調に伸びると予測する。
- ・ また、新型コロナ危機が世界経済に大きな打撃を与えるなかで、貿易収支も大きな影響を受け、2020 年度においては特異な動きも見られることには留意が必要である。われわれの見通しによれば、2020 年度の輸出総額は 2019 年度比 10.9%減少するが、数量要因と価格要因に分解すると、輸出数量は同▲10.0%、輸出価格は同▲1.0%である。これは、2020 年度上半期に外需が急減し、輸出の数量が大幅に減少したことを反映している。一方、2020 年度の輸入総額は同 14.4%減少するが、輸入数量は同▲6.6%、輸入価格は同▲8.3%であり、価格要因がかなり効いている。これは、世界経済の落ち込みと先行き不透明感により、資源や素材の市況が下落したことによる部分が大きい。

見通しでは、輸出総額(通関貿易統計ベース)は 2020 年度に前年度比 10.9%の減少を記録した後、2021 年度は同 8.5%の増加に転じるとの予測結果になった。

まず、2020 年度の輸出は、新型コロナ危機により急減した後、総じて持ち直しに転じている。見通しにおいては、サプライチェーンの制約が解消するとともに、各国での外出規制等で抑制されていた需要が増加に転じることを織り込んだが、それでも 2020 年度を通じた輸出の伸び率は 2 桁のマイナス(2019 年度比▲10.9%)になると予測する。

次に、2021 年度の輸出は、2020 年度比で増加に転じるが、伸び率は 1 桁(2020 年度比+8.5%)にとどまり、商品別に見ると、2019 年度の水準まで回復しない品目も多いと予想する。仮にわれわれの前提条件に反して、主要国で新型コロナ感染者の増加傾向が継続する、あるいは、ワクチンの普及が遅延するような場合には、輸出の伸びが下振れる可能性も大きいと認識している。

一方、輸入総額は 2020 年度に前年度比 14.4%の減少を記録した後、2021 年度は同 6.5%の増加に転じるとの予測結果になった。

まず、2020 年度の輸入の大幅減については、新型コロナ危機が世界経済の需給両面にショックを与え、資源・素材市況が下落したことにより、価格要因による減少(2019 年度比▲8.3%)が数量要因による減少(同▲6.6%)よりも大きいことが特徴である。

次に、2021 年度の輸入は 2020 年度比 6.5%の増加と、2020 年度の落ち込みを勘案すれば低い伸びにとどまると予測した。この理由の一つは、資源・素材市況は当面低水準で推移すると予想されるため、輸入価格の伸びは低くとどまる(2020 年度比+3.2%)と想定したためである。さらに、新型コロナ感染症の影響は徐々に鎮静化に向かい、東京オリンピック・パラリンピックも新型コロナ感染防止に留意しつつ開催されることを前提条件としているが、日本経済の実質 GDP 水準は 2021 年度中には新型コロナ危機前には戻らないことから、内需回復は緩慢で輸入の回復が遅れると予想される。

以上の結果、2020 年度、2021 年度の通関貿易収支は、それぞれ 1 兆 5,190 億円の黒字、2 兆 9,860 億円の黒字になると予測する。

2020 年度の経常収支は、新型コロナ感染症の影響を受けて訪日外国人による消費(いわゆるインバウンド消費)が減少したこと等により黒字幅が縮小し、16 兆 5,160 億円の黒字となると予測した。2021 年度の経常収支は、貿易収支の改善、インバウンド消費の持ち直し、第一次所得収支の黒字増により、20 兆 7,340 億円の黒字となり、2019 年度と同水準の黒字幅に戻る見通しである。主に対外投融資による利

子や配当の受け払いを集計した第一次所得収支は、世界的な経済環境の悪化を反映して、2020年度、2021年度ともに2019年度の水準を下回ると予測する。

IV.主要商品別の見通し(通関ベース)

1. 輸 出

◆◆◆2020年度◆◆◆

世界経済が大きく落ち込んだなかで、2020年度の輸出は2019年度比10.9%の減少となる。内訳は、輸出数量が同10.0%の減少、輸出価格が同1.0%の低下である。

品目別に見ると、自動車等の輸送用機器、鉄鋼、非鉄金属等の原料別製品、原動機等の一般機械の輸出減が、それぞれ輸出総額を4.3ポイント、1.8ポイント、1.5ポイント押し下げる。自動車の輸出は、足元では米国向けをはじめ回復基調となっているが、年度を通じて見ると2割超減少する。原料別製品の輸出の約3分の1を占める鉄鋼は、ASEAN・韓国向けの回復が緩慢で、2019年度比25.6%の減少となる。一方、アルミ等の非鉄金属の輸出は、2019年度に下落していた価格が反発したことに加え、2020年度下半期には需要が持ち直すことにより、同10.8%の増加となる。また、原動機等を含む一般機械は、企業の設備投資意欲の減退を反映して、同7.8%の減少となる。

2020年度の輸出は幅広い品目で減少を記録するが、そのなかで食料品は、2019年度比4.5%の増加となる(ただし、輸出総額に対する寄与度は0.04ポイントの押し上げにすぎない)。これは、新型コロナウイルス感染症の影響により外食向け食料品の輸出が落ち込む一方、果実、野菜等内食向け食料品の輸出が順調に伸びることによるものである。

◆◆◆2021年度◆◆◆

世界経済が緩やかな持ち直し傾向に転じ、日本の主要輸出相手国である中国が回復基調を強めるなかで、2021年度の輸出は2020年度比8.5%の増加となる。内訳は、輸出数量が同7.0%の増加、輸出価格が同1.5%の上昇である。

品目別に見ると、輸送用機器、一般機械、原料別製品の輸出増が、それぞれ輸出総額を2.0ポイント、1.7ポイント、1.2ポイント押し上げる。すなわち、2020年度に大幅な輸出減となった品目が増加に転じるところが多い。一般機械の輸出は2019年度と同水準に回復する。一方、輸送用機器と原料別製品の輸出は2019年度の水準までは回復しない。輸送用機器のうち、自動車の輸出は、欧米向けを中心に回

復基調を続けるが、やはり 2019 年度の水準には戻らない。一般機械のうち、原動機の輸出は、新型コロナウイルス感染症の影響が鎮静化した後も、環境規制厳格化等の影響で石炭火力発電所等の需要が弱い動きとなり、2020 年度比 6.1%の増加にとどまる。原料別製品のうち、鉄鋼、非鉄金属の輸出は、価格および数量の緩やかな回復により、それぞれ同 10.5%、同 9.0%の伸びを記録する。

2. 輸 入

◆◆◆2020年度◆◆◆

2020 年度の輸入は、新型コロナウイルス感染症による世界経済の需給両面へのショックに伴い、2019 年度比 14.4%の減少となる。内訳は、輸入数量が同 6.6%の減少、輸入価格が同 8.3%の低下である。

品目別に見ると、鉱物性燃料、輸送用機器、電気機器が、それぞれ輸入総額を 8.7 ポイント、1.2 ポイント、1.0 ポイント押し下げる。輸入総額に占めるシェアが大きい鉱物性燃料のうち、原油及び粗油、LNG、石炭の輸入は、それぞれ 2019 年度比で 3－5 割減少する。新型コロナウイルス感染症による国内経済活動の停滞を受けた輸入数量の減少に加え、資源市況が下落したことによる部分が多い。自動車の輸入は、主要輸入相手先である欧州での生産低迷の影響が大きく、2019 年度比 18.8%の減少となる。また、電気機器のうち、携帯電話等の通信機の輸入は、外出自粛の影響もあって同 5.2%減少し、半導体等電子部品の輸入は、テレワーク拡大等に伴う需要増で数量は増加するが、価格低下を主因に同 3.7%減少する。

◆◆◆2021年度◆◆◆

2021 年度の輸入は、国内経済の持ち直しに伴い、2020 年度比 6.5%の増加となる。内訳は、輸入数量が同 3.2%の増加、輸入価格が同 3.2%の上昇である。

品目別に見ると、鉱物性燃料、原料別製品、食料品が、それぞれ輸入総額を 2.5 ポイント、1.6 ポイント、0.4 ポイント押し上げる。鉱物性燃料の輸入は、原油や石炭の価格上昇を主因に 2020 年度比 17.0%の増加に転じる。原料別製品の輸入は同 15.2%の増加に転じ、うち鉄鋼、非鉄金属の輸入はそれぞれ同 10.4%、同 41.0%の伸びを記録する。また、食料品の輸入は、外食需要の持ち直しにより魚介類・肉類を中心に同 3.6%の増加に転じる。

V.経常収支の見通し

◆◆◆2020年度◆◆◆

経常収支は16兆5,160億円の黒字となるが、黒字幅は2019年度の20兆1,410億円から縮小する。内訳を見ると、貿易収支は、輸入の減少が輸出の減少より大きく、黒字幅は2019年度の6,670億円から3兆1,630億円に拡大する。サービス収支は、新型コロナウイルス感染症の影響によりインバウンド需要が急減したことを受けて、赤字幅が2019年度の4,780億円から3兆4,710億円に拡大する。第一次所得収支は、世界的な経済環境の悪化に伴う投資収益の減少を受けて、黒字幅は2019年度の21兆4,210億円から縮小し、18兆9,140億円の黒字となる。

◆◆◆2021年度◆◆◆

経常収支は、黒字幅が2019年度をやや上回る水準に回復し、20兆7,340億円の黒字となる。内訳を見ると、貿易収支の黒字は、輸出の伸びが輸入の伸びを上回ることにより、4兆7,200億円に拡大する。サービス収支は、インバウンド需要が徐々に回復するなかで、赤字幅が2兆1,010億円に縮小する。第一次所得収支は、世界経済の回復を背景に海外から受け取る配当金や投資収益が持ち直し、19兆8,540億円の黒字となる。

以 上